



TITLE:

[蘭]學創始以前長崎に於ける萌芽期の[近]世地理學

AUTHOR(S):

岩根, 保重

CITATION:

岩根, 保重. [蘭]學創始以前長崎に於ける萌芽期の[近]世地理學. 地球
1935, 24(1): 33-44

ISSUE DATE:

1935-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184442>

RIGHT:

蘭學創始以前長崎に於け

る萌芽期の近世地理學

岩 根 保 重

一

文化元年（一八〇四）露西亞の修好使節として派遣せられたレザノフを奉じ、我が漂流民を送還して長崎に來航したクルウゼンシュテルンの世界周航記を讀むと、一七二九年刊行の巴里アカデミーの紀要を引用して、一六二二年十一月八日即ち慶長十七年十月十六日の月蝕が澳門及び長崎の兩地で觀測せられ、その初虧の時差が恰も一時間であつたことにより、兩地經度の差が十五度に當ることが報告されてゐることを述べ、之が長崎に於ての經度測定の最初の出來事であらうとしてゐる。この觀測並びにその意義に關

しては、⁽³⁾テレキの日本地圖沿革史の中にも紹介せられてゐるが、それ等によると澳門での觀測者は後に「職方外紀」を著してゐる艾儒略即ちジュリアス・アレニ等であり、長崎での觀測者はクラッセの日本西教史に殉教的最後を傳へられてゐるシャル・スピノラで、後者は復圓の時刻の報告がないので完全なものとは云へないが、恐らく之が我國に於て行はれた最初の天測に基いて行はれた經度の測定であつたらしい。尤もこの觀測は外人の手によつてなされたものであつたから、後年文政の頃に至つて青地林宗により、このクルウゼンシュテルンの紀行記の一部が「奉

使日本紀行」として翻譯せられた迄は、その結果も當時の日本人の地理知識には何等加へる所はなかつたかも知れぬ。しかし兎に角、慶長元和の頃に天文地理に關する知識素養を有した外國宣教師や般海者が長崎に在留してゐたことはこの土地の日本人の知識界に全然無影響であつたとは考へられない。⁽²⁾かの葡萄牙人エマヌエル・ゴンザロに就いて航海に必要な天測やその他數理地理に關した知識を習得し、今日「元和航海記」と稱せられてゐる一書を遺してゐる池田好運の如きがこの地に在つたことはこの想像の事實なることを裏書するものと云へやう。

註① Krusenstern, Adam Johann von, Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserl. Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadshda und Newa unter dem Commands des Capitäns von der Kaiserl. Marine A. J. von Krusenstern. 3 Bde. St. Petersburg 1810—12.

本書は露語版と同時に出版されてゐる。羽仁五郎譯「

クルウゼン・シュテルン日本紀行」として異國叢書中に收録、同書上卷二四六頁以下參照。

② Teleki, P.G.—Atlas zur Geschichte der Kartographie der japanischen Inseln, 1909. Kapitel XIII.

Die Kartographie Südjapans im XVII Jahrhundert und ihre Quellen. 參照。

③ 川島元次郎氏「續史的研究」、海表叢書第三卷新村博士解題等參照。

二

當時渡來の宣教師に布教の手段として天文その他の學術に關する造詣が要求せられてゐたことは、我國に初めて渡來した耶蘇會の宣教師ザビエルの書簡によつても明かであり、慶長三年以來有馬や天草にあつた天主教學林の主なるものは長崎に移されたと云ふから、天主教の教義や他の學藝と共に彼等の天文地理説もこの學林を中心として邦人の間に傳へられてゐたことは殆んど疑ひのない所である。「南蠻運氣論」の譯著者澤野忠庵即ちクリストファン・フェレイラが宣教師として渡來したのは慶長十六年頃のこと

で彼が我國に在住四十年にも及べる間に、彼の天文地理に關する知識がどの程度に長崎の學問界に影響する所があつたかは不明であるが、正保三年南蠻流天文學を修めたる故を以て捕へられ獄死した長崎の談天家林吉右衛門の如き澤野忠庵について之を聽いた一人であるらしい。

「南蠻運氣論」の所説を向井玄松が明曆年中長崎に於て支那流舊説を根據として辯駁批評を加へたものが「乾坤辯説」四卷で、玄松の議論は多く取るに足らぬものであるが、支那でも當時既に渡來の宣教師により西洋流の天文地理説が傳へられてきてゐたのであるから、之等西説に基ける漢譯天文地理書も長崎には入つてきてゐた筈で、寛永禁書以後と雖も之等新學風の興起を根絶することは不可能であつたに違ひない。『乾坤辯説』に於ける玄松の序に、「世人天文地理之說蠻學を至れりと思ふこと久し」とあるに見てもこのことは明かである。かくてこの地の學問界には「先民傳」に見ゆる林吉右衛門以下、小林

謙貞、盧草磧、盧草拙等儒者醫人にして南蠻學派の系統を引く西洋流の天文學を修め之を講ずるものが相ついで出てきてゐるのである。小林謙貞には「儀略説一名一輪論」の著があり、本書は上梓に至つてゐないが、書中の「世界萬國地球圖」は後に寶永五年、門人稻垣光朗によつて大阪で刊行されてをり、之は利瑪竇世界圖の傍圖たる極投影圖二つを其まゝ描寫したものである。

之等直接には宣教師等により、間接には漢譯書によつて傳へられたる當時の西洋天文地理説は響にも述べたことのあるやうに、歐羅巴中世に於ける羅馬法皇允許のアリストテレス宇宙論を根幹とした天動地圖の説で、地動説の如きは尙ほ肯定さる迄には至つてゐないのである。しかし之等も當時の邦人にとつては極めて新奇なものであつたに違ひなく、長崎の學問界は最も早き時代に於て之等の學説に接してゐた譯で、享保五年刊行西川如見の「長崎夜話草」中の長崎

土產物の條に「天文道具色々。日尺・星尺・圓規・日晷・渾天儀・星の圖・地球圖」などあるに見ても、蘭學創始以前この地に早く西洋流の天文乃至數理地理に關する知識が成長してゐたことが推察せられるのである。

註① Coleridge, H.J.—Life and Letters of St. Francis Xavier. 1890 及び淺井虎八郎編「聖ふらんせすこ・ギ

ベリよ書翰記」(明治廿四年)二五一頁六二六頁參照。

② 澤野忠庵は改宗歸化の後、異宗吟味の目付となり、長崎本五島町に住した。

③ 大槻如電博士「新撰洋學年表」による。

④ 拙稿「我國に於ての黎明期の數理地理學」(地球二二ノ六)

三

數理地理學關係の知識に於けると同様、異邦に關する地理知識の集積も亦當然この地に於て特に顯著なるものがあつた。

永祿十年天主教の布教が長崎に開始せらるるに及んで元龜元年には初めて葡萄牙船の入港があり、爾來暫くこの土地は耶蘇會布教並に日葡

貿易の根據地として、天正八年の頃には一時その地上權は教會の手中に歸してゐた程であるから、宣教師や商人等の渡來在住する者が少くなかつた。如見が正徳二年著の「天文義論」の中に於て「戎蠻紅毛の類は武家商家の差別なく專萬國に通路するを以て功業とす、此故に行舟の術を鍛鍊し商舶を整へ國海を往來し羅經の法を窮めて世界の大半不到と云所なし是故に能く萬國の地理を知り大海を東西に一周して大地圓形にして萬國圍居せるの義を知れり。其事百五十年已來の義にして古は廣く往來せし事無し者也則世界渾地の圖を製し大地一周の度分を極めたり、其圖唐土日本にも傳りて今遍く民間に有て云々」と述べてゐるが、南蠻人渡來の初期に於て早く世界圖や地球儀の類が我國に齎來せられてゐたことは今日に傳はる彼我當時の記錄によつても確實で、かくて商業上並に宗教上彼等との接觸交渉の最も多かつた長崎の知識界に西歐人既知の地理知識が比較的急激に流入してきて

ゐたであらうことは疑ひない所である。

かゝる受動的の世界知識の擴大があつた他方に於て慶長元和時代この地は所謂朱印船貿易の中心地であつたから、邦人航海者や貿易家の實際の見聞に基いても南洋方面の地理知識は餘程確實になつてきて居り、このことは當時彼等の使用してゐた海圖や前述の「元和航海記」或は天竺德兵衛の「渡天物語」などの記述に見ても明瞭である。しかし學問としての地理學が未だ生誕してゐた譯ではないから、當時彼等の地理知識を集成せる地理書たる成書が出てゐないのは當然として、こゝに朱印船貿易盛時の海外知識に基き記載せられたと考へられるもので、主として彼等の活動範圍たりし南海諸港への長崎よりの距離並びにそれ等諸港との間に於ける主要貿易品目を掲げ一種の地理書記述をなせる文書の存在し、之が長崎に於て製作せられたらしいと云ふことはこの地に於ける地理學發達の跡を辿る上に於て興味少しとしない。

四

この種文書で今日に知られてゐるものは一、内田銀藏博士が史林第二卷第二號に於て述べられてゐる「異國渡海船路ノ積リ、一名洋記」二、能登國鳳至郡總持寺別院所藏にかゝる南瞻部世界圖幅に所載の「日本長崎異國渡海之港船路積」三、中山久四郎博士がその著「史學及東洋史の研究」中に記載せられてゐる長崎古寫萬國圖所載の「日本長崎ヨリ異國江渡海之湊口マデ船路積」四、水戸彰考館所藏にかゝる日本異國通寶書所載の「日本從長崎異國江渡海之湊口迄船路積」五、藤田元春先生が「歴史と地理」第三十一卷第一號に於て紹介せられてゐる石橋五郎博士所藏世界圖所載の「日本長崎ヨリ異國江渡海之湊口迄船路積」六、近藤正齋著亞媽港紀略索引用の「日本長崎ヨリ異國へ渡海之湊口マデ船路積」七、牧野信之助氏が大阪朝日新聞社編「開國文化」所收同氏論文文中にて紹介せられてゐる鷹見泉石模寫世界圖幅所載の詞書など多

數に上る。之等の中で二と四及び五には年記なきも、三と七には「此繪圖寛永十四年丁丑八月於長崎書之」、一と六には「寛永十四年八月朔日」の奥書がある由で、岩生成一教授は三の中村久四郎博士所藏のものを除ける他の諸本につき、それ等詞書の内容を比較研究せられ、之等文書が大體同一系統のもので、その筆寫年代は別とするも之等詞書の原本が作製せられたのは寛永三年西班牙の臺灣占領の年以後寛永十四年迄の約十年間であらうと考定せられてゐる。しかしてこの詞書原本の作製地が長崎であることは里程の起點が長崎になつてゐることのほか、三と七には長崎にて之を書寫せる旨の奥書があり、二は長崎浩臺寺より總持寺別院に寄進せられたる由の寺傳の存することなどによりて殆んど疑ひない。

之等に記載せられてゐる地域は南京福州漳州天川以下大部分南洋方面の諸港で、之に「いんげれす」及び「あらんだ」の二國を加へたる二十

又は二十一箇所ばかりに過ぎないが、兎に角簡單ながら商業地誌とも見得らるゝ記述をなした文書が既に寛永年代に長崎に於て作製せられてゐるのである。

註 ①牧野信之助氏「世界圖並に南蠻人渡來圖屏風に就いて」

② 岩生成一氏「石橋博士所藏世界圖年代考」(歴史地理六一ノ一)

③ 石橋博士所藏圖所載の詞書全文は、藤田先生が「歴史と地理三一ノ一」及び「人情地理一ノ四」に於て紹介せられてゐる。中村久四郎博士所藏圖所載のものも之と大同小異であるが、その二三を摘記してこの種文書の大要を窺ふこととする。

日本長崎ヨリ異國江渡海之湊口マデ船路積

但三拾六町一里 大明國之内

一南京 此所日本ヨリ御朱印船
參候所ニハ無御座候 三百里

彼地ヨリノ船年々日本江參申候

一此所ヨリ白糸綸子縮緬紗綾南京段子其外卷物
色々皿茶碗推朱曲輪之類花入何ニテモ手之能

物白砂糖菜種之類書簪持來申候

一日本ヨリ彼地へ渡申候物銅鑊鍍水風呂

一福州 右同前

一此地ヨリ來物南京同前毛氈水銀持來申候

一 天川 右同前

一 此所を南蠻人商賣のために船かゝりの島をか
り住宅仕大明之物を日本江買來又其身之國へ
も買渡し申候日本江買來候物印子白糸段子の
類さやちりめん綸子緋珍紅糸白まがひ糸毛氈
ひろうと白黒木綿鯨水銀とうたん針唐ノ土光
明朱藥種色々癖香山歸來はくまこましやく
ま皿茶碗砂糖蜜積之類其外南蠻物天竺物持來
申候南蠻人と申者は國々江商賣に參申候故他
國之物何にても賣來申候

(中略)

一 日本より彼地に持來り候物銅所帶之道具蒔繪
之類、銅之道具屏風疊ぬひ薄染之小袖

一 いんげれす國	右同前	一 萬千七百里
一 おらんだ國	右同前	一 萬千九百里

一 此兩所より參申候物鴉々及羅砂はあのらせい
たへるさい。ごろさいほろけんしや。あるみ
さい。ゑかれたますこらにや何れも毛おりの
類ひいところの類蒲萄酒

五

上に述べた詞書七例の中、二、三、五、七は地
圖面餘白に記載せられてゐるのであるが、之等

蘭學創始以前長崎に於ける萌芽期の近世地理學

地圖の原本もやはり長崎に於て之等詞書と略々
同年代に作製せられたものと考へて誤らないで
あらう。即ち長崎では西洋船舶載の地圖や航海圖
或は支那譯せられたる世界圖などに目の觸るゝ
機會も他の土地に比して多かりしことは疑ひな
く、從つて地圖に關する知識の如きも相當なる
進歩を遂げてゐたであらう。かくて鎖國後十年
を出でざる正保年間に至るとこの地で我國最初
の刊本世界圖たる「萬國總圖」が開板せられてを
り、この圖は利氏の「坤輿萬國全圖」に大體一致
してゐるので之を典據としたもののやうにも思
はれるが、記載の地名が利瑪竇の漢譯地名とは
全然異つて西洋流の讀方になつてゐる所が少く
ないことなどからすると、西洋直輸入の新らし
き世界知識が之に加つてゐると認めてよく、長
崎に於てこそ當時かくの如き比較的進歩したる
地圖の作製がなされ得たと考へられるのである
。本圖に遲ること六十年の寶永五年に江戸
にて開板せられたる石川流宜の「萬國總界圖」が

その地形及び地名の訓讀に於てこの正保長崎板の「萬國總圖」に比し著しき遜色があるのも一つには江戸及び長崎兩地に於ける地理上知識の相違を示すものと云ふてよいであらう。また寶永三年大阪で刊行せられた馬場信武の「初學天文指南」なる書があるが、この書でもその本文並びに挿入の「山海輿地全圖」に於て歐羅巴なる文字にオランダと訓してあるなど、同時代に出た西川如見の「華夷通商考」の如きに比べてその地理上知識の著しき不足を示してゐるのも同じやうな理由に於て首肯し得られる所である。

この正保長崎板萬國總圖には屢々之に附隨して「四十國人物圖」なる木版筆彩の人物風俗圖が共存するが、寛文十一年にも同系統の人物圖が地圖と共に一枚刷に板行せられて居り、之等は享保五年刊如見の「四十二國人物圖說」の源流と見得らるゝもので、我國に於ける創始期地理學の記念的存在とも云ふべき之等世界圖並に人物圖が長崎に於て早くも板行せられてゐるのはあ

ながち理由のないことではない。

註① 例へば利氏圖では喜望峯が大浪山となつてゐるのに正保圖ではカボゴハエスペランシャとしてある如きその一例である。

六

上述した「異國渡海船路積」の如き文書の作製せられた寛永年代より三十餘年を経たる寛文十年にかの澤野忠庵並びに向井玄松の「乾坤辨說」成稿に際し之に關係を有したと云はるる長崎の通事西吉兵衛の撰したる「諸國土產書」なる一書が今日に遺つてゐる。本書は未見のためその内容を詳細に知ることが出来ないが、佐村八郎氏の國書解題を參看するに西洋諸國の物產の品類及び產地等を記せるものもあつて、しっかりとせば「異國渡海船路積」も物產貿易品目を主として記載してあり、之等に次いで元祿八年に出たる我國最初の刊本世界地誌とも云はるべき如見の「華夷通商考」も亦物產並に通商關係の記事が中心となつてゐることなどを以てするに、長崎に於ける西洋地理學の種子はかくの如き商業地誌

的實用知識を溫床として芽生えてゐたものと云ふてよい。

我國洋學の權輿と云はるゝ新井白石以前に於て夙に新學の先驅をなし、特に天文並に地理學の領域に創關の功少からざる西川如見が長崎の地に出たのもその特殊なる環境から見て決して偶然ではない。如見は名を忠英と云ひ、通稱は次郎右衛門、求林齋と號し慶安三年長崎に生れた。幼にして父を喪ふたが二十歳にして學に志し、偶々長崎に來遊した京都の儒者南部艸壽の門に入り學ぶ所があり、生來天文曆數の學を好み虞書曆象俗解、教童曆談、天文義論、天文精要、天文和歌注、氣運論、兩儀集說、和漢運氣指南編、天文五行解、七曜右旋辨論、運世年卦考、怪異辨斷等天文曆學、數理自然地理關係の著述が甚だ多く、特に曆學の造詣により享保三年江戸に召されて將軍吉宗の諮問に應じてゐる如きは天文學家としての彼の名聲の尋常ならざることゝを推知するに足りるものである。

如見の説は先民傳（盧千里撰文化二年刊）に「又講於天文曆數由古聖賢書暨先儒諸說並戎蠻故老之所傳多所發明」とあるやうに支那流の舊天文説に當時の西洋新説をも採り入れたもので、彼は天地は世界萬國一天地なる故に日月五星も共に一體、道理も亦一理にして兩者も元來は二つには非ず、たゞ君子は之によつて道德性命の理を窮めんとし戎蠻は之によつて萬國に行舟し以て利を收めんとするもので天學そのものには華夷の別存せずとなしてゐる。試みに正徳四年序の「兩儀集說」を見るに卷一に天體、地球附五帶、黃赤二道、南北二極、子午規並に卯酉の規、地平規、十二官次並に三十六禽、九天次第高下、天行左旋七曜右旋、卷二に日月體象並に大小、日月右旋行度並に盈縮遲疾、月行九道並に交周、日月食朔望弦晦、卷三に晝夜長短、四季八季並に寒暑の不同、曆法大意並に外國の曆、古今の曆辨並に曆差、歲差、卷四に五星伏見行度、列宿衆星の名數、卷五に衆星變、客星、五

星變異並に羅計氣亭、日月の變、卷六に風雲雨露霜雪並に霧霞、雷電天開天明並に地震地裂地燃、卷七に潮汐辨、五行生尅辨、風氣三部說、行舟指南大意、卷八に諸目圖式等を細說してあり、之によつても天文學家乃至數理自然地理學者としての彼の面目の主要を窺ふことが出來やう。しかしてその學說の内容は勿論當時の漢譯天文地理書或は我國に於ける南蠻系天文學家の所說以上に出たものではなかつたが、向井玄松の「乾坤辨說」に於ける所論の如きに比較すれば著しく進歩したものであつた。しかしてかくの如き數理自然地理學の方面のみならず、彼の名により元祿八年京都の書肆梅村彌與門古川三郎兵衛が上梓してゐる「華夷通商考」二卷二冊があつて海外に關する知識の普及未だ充分ならざりしその當時この書が世人を啓發したりし所は蓋し僅少ではなかつたと思ふ。尤も本書は寶永五年刊行の「增補華夷通商考」の自記作例によると彼自らの意旨によりて出版せられたもので

はないことになつてゐるが之も鮎澤文學士の指摘せられてゐる如く事實は彼自らの著作する所であつたかも知れぬ。要するに初版刊行後十三年にして「增補華夷通商考」五卷五冊本を公けにして前者の誤りを正し缺を補ふてをり、更に享保五年には「四十二國人物圖說」を著してゐるなど、啓蒙期邦人の地理知識擴大に彼が貢獻してゐる所は甚だ大で、我國最初の西洋地理學者たる地位は如見に占められてゐると稱するも敢て過言ではあるまい。彼にはこれ等のほか、「日本水土考」「兩域人數考」「長崎夜話草」の如き地理に關係ある著述もあり、少くとも草創期我國地理學界の第一人者と云ふべきであつた。

註① 鮎澤信太郎氏「艾儒略の職方外紀に就いて」(地球二三ノ五)

七

初版並に增補華夷通商考兩書に於ける外國外夷の記事が幕府の和蘭人通商關係の調書の如きもの、或は長崎に於ての和蘭人や支那人につい

ての傳聞に基けるものであることは、「増補華夷通商考」卷之四に「右外國外夷五十五箇國於長崎聞傳ル處ヲ記スル者也」、卷之五外夷増附錄目次の終に「右ノ諸國ハ(中略)唐人紅毛ノ諸説ニ依テ記之者也」とあることや、初版下卷に「右和蘭人書付テ江府へ指上ゲタル寫也、其外數年往來之異國人ニ相尋書記ス者也」とあるなどによつて明かである。寛永の禁書令により西洋地理の書は勿論、漢譯西洋地理書もすべて輸入を禁ぜられてゐたのであるから、之等を典據とした西洋地理書が公刊せらるるに至らず、傳聞を基とした「華夷通商考」の如き地理的文書が編纂せられてゐるのは當然と見てよいであらう。しかし「華夷通商考」と雖もその卷之五外夷増附錄の部は鮎澤氏が嚮に注意せられてゐる如く職方外紀の翻譯と認むべき所多く、享保十六年この書解禁以前既に長崎の學問界には潜行的に新地理學の浸潤は止む所がなかつたものらしい。

「國書解題」に正徳元年寫本の奥書を有する

蘭學創始以前長崎に於ける萌芽期の近世地理學

「異國產物記」なる書をあげて「上卷に清國十五省の建置方角道程時運人物戶口北極度數其他を記し、下卷を外夷とし朝鮮琉球大宛東京公趾等の土地風俗道程人物等の事を記す、題して產物記といふも寧ろ產物以外の事を記したり、卷末に右外國外夷五十五國於長崎以聞傳處記之者也とあり、書中の記事には貞享四年のことを最近のものとし」との意味の解題がしてあるが、本書はその題名から察するに物產關係の記事を主としたる原本があつて、之から物產以外の記事を抄出したるものなるべく、しかりとせばその他の諸點では殆んど全く初版「華夷通商考」もしくは「増補華夷通商考」卷之四迄の内容と相一致してゐるやうに思はれる。かく考へるとこの異國產物記なる寫本の原本は「華夷通商考」か、しからずんば、「異國產物記」が「華夷通商考」の原稿かも知れない。

兎に角寛永の「異國渡海船路積」の如き文書に次いで寛文には西吉兵衛により「諸國土產書」が

出て居り、先後は不明であるが、如見の時代に
至つてこの「異國產物記」や「華夷通商考」がある
など、物産乃至通商關係の記載を主とせる地誌
的文書が相次いでこの土地に於て撰述せられて
ゐるのは當代唯一の海外貿易港たりし長崎の環
境の反映に外ならぬと見てよい。されば既に元
祿以前和蘭より天地圖の舶載があり、元文年間
には南蠻學派の天文學を盧草拙に學んでゐた長
崎の儒生北島見信に一七〇〇年和蘭出版のヨア
ンネス・ヘリウス編天地二圖の解説たる「翻譯
天地二面贅說」の著があるなど安永天明の蘭學
創始以前、早くも紅毛學派の天文學地理學の種
子が長崎の地に蒔かれてゐるのであつて、その

後寛政三年この地に本木仁太夫の「天地二球用
法」、寛政十年志筑忠雄の「曆象新書」などの翻
譯が出るに及び、蘭學の一般的興隆と共に地理
學も漸く本格的に成立するに至つてゐる。かく
て文化文政以後、我國一般に絢爛たる地理學隆
盛時代を現出し、遂に西洋の地理學界に對する
著しきハンデキャップを克服して地理學の世界
的水準に迄近づき得てゐるのであるが、之も一
に長崎の土地を溫床として育生せられてきてゐ
た近世地理學の萌芽が、その花を開いたのに外
ならぬと云ふてよいであらう。(完)

註 ① 鮎澤信太郎氏前編論文。

② 通航一覽參照。